

# 豊かな感性を育む体育科学習

—第2学年「なわとび王国へ行こう」の実践をもとに—

川 中 昌 樹

## 1 はじめに

なわとびは、とかく続けて跳べた回数や時間を課題として、教師主導の学習展開に陥りやすいといった点が指摘される。また、うまく跳べない子どもに「先生、どうしたらうまくとべるのですか?」と問われた時に、言葉でうまく説明できない難しさがあるのも事実であろう。2年生の子ども達に豊かな感性を育むためには、子ども達にこの教材をどのように与え、どんな学習展開をすべきなのだろうか。本稿では、1回旋1跳躍を中心とした短なわとび「なわとび王国へ行こう」の実践をもとに、豊かな感性を育む体育科授業づくりの支援のあり方を考察してみたい。

## 2 指導事例

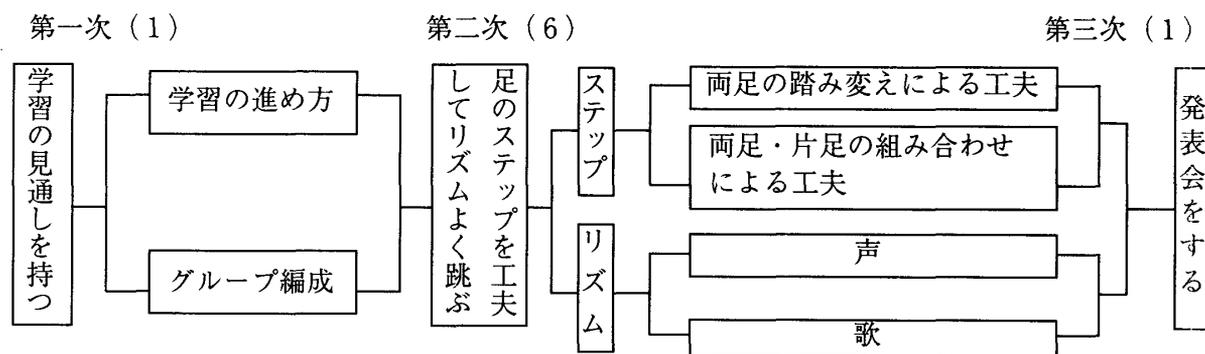
### (1) 単元について

2年生のなわとびは、基本の運動の中で用具を操作する運動として指導書に取り上げられている。なわとびは、タイミングよくなわや体を操作しながら続けて跳ぶことを楽しむ運動であるといえよう。また、回旋のさせ方や跳躍のリズムを工夫することによって、多種多様な跳び方を楽しむこともできる。子どもにとっての楽しさや喜びは、できない跳び方ができるようになったり、続けて楽に跳べるようになった時に一層深まるであろう。

### (2) 指導目標

- ① いろいろな足のステップでの1回旋1跳躍の跳び方で、リズムよく続けて跳ぶことができるようにする。
- ② 1回旋1跳躍の足のステップを工夫して跳ぶことができるようにする。
- ③ 安全に気を付け、友達と見せ合い、なかよくなわとびができるようにする。

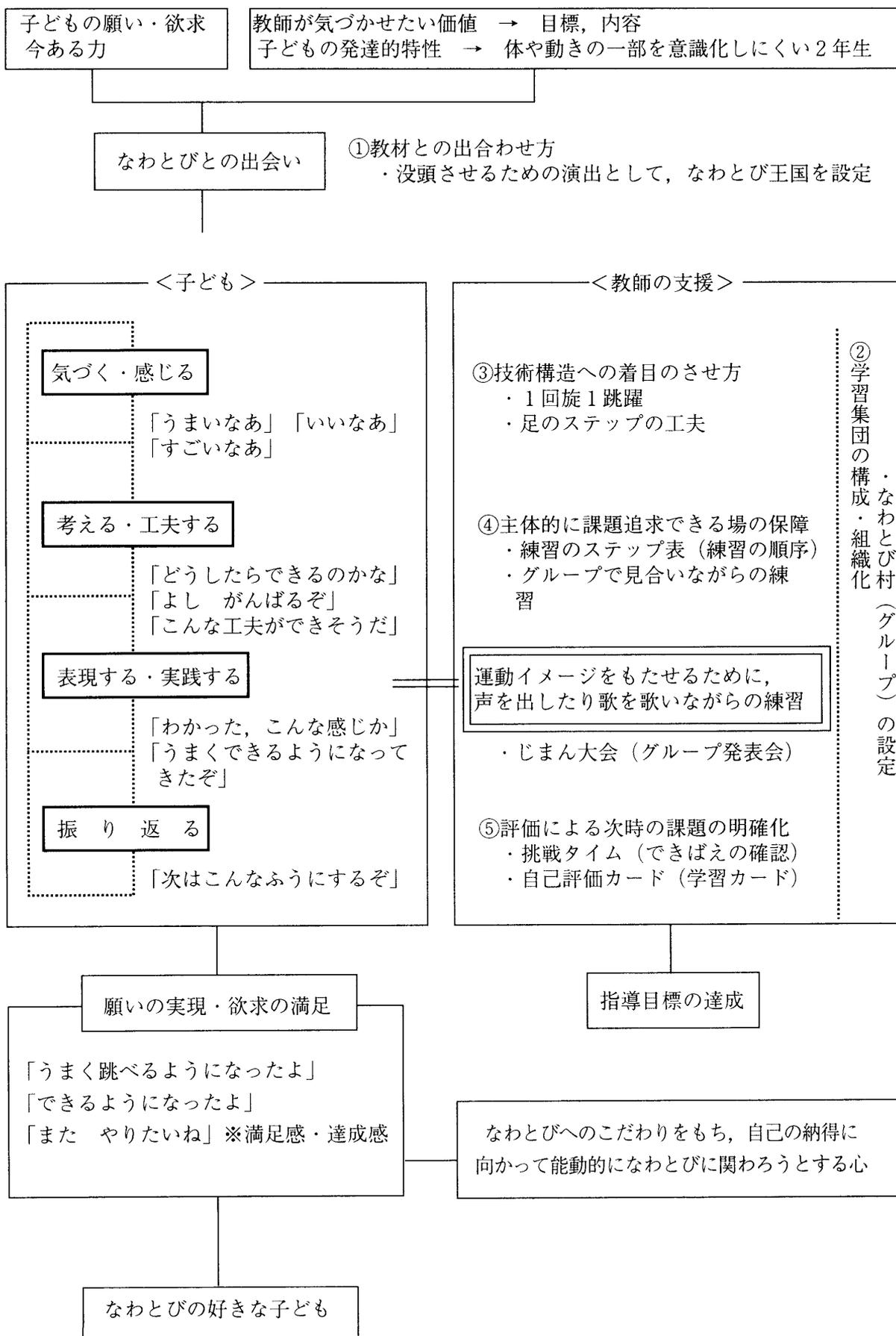
### (3) 指導内容と計画



### (4) 研究の視点

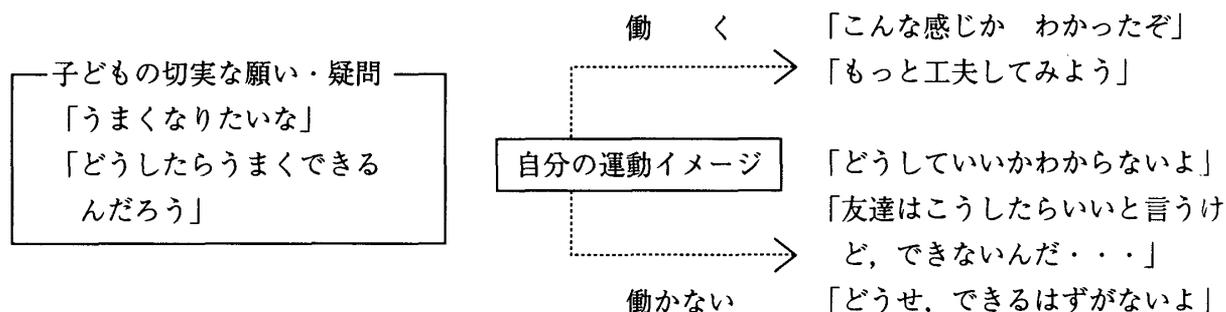
1回旋1跳躍がもっとうまくなりたい、あやとびや2重跳びなどの未知の跳び方ができるようになりたい……。 「なわとびでどんな学習がしたいですか?」という問いに対する子ども達の願いである。この願いを実現し、満足感・達成感を味わわせるためには、自分自身が納得するような実感をともなったわかり方をし、さらにうまくなっていく、できるようになっていくことが大切にされなければならない。こうした基本的な考えをもとに、本実践では5点の支援の手だてを次のように位置づけ、学習を構想した。

単元全体の構想



本実践では、「うまくなりたいな」「どうしたらうまくできるんだろう」といった、子どもの願いや疑問が、子ども自身の体で「こんな感じか、わかったぞ」「気持ちよく続けて楽に跳べるようになってきたぞ」というふうにわかっていく過程に着目した。従来から運動イメージの重要性が指摘されている。運動イメージを働かせることは、自分の課題を追求したり、さらに工夫したりしていく上で非常に大切であると思われる。それを表してみたのが図1である。

図1



本実践のなわとび運動において、この運動イメージを働かせることとは、リズムの感じを体感させることであると考えた。「こんな感じのリズムか わかったぞ」といったリズムの感じが自分の体で実感を伴ってわかることは、2年生の子どもにとって、必ずしも言葉で言い表せるとは限らない。しかし、リズムの感じを自分の体で感じとった時には、おそらく「いい感じで跳べているな」「気持ちいいな」と思うはずであり、「リズムよく続けて跳ぶ」という子どもの願いを実現させるためには、この過程を大切にすべきであると考えられる。こうした視点に立って、次のように仮説を設定した。

<仮説>

自分がやりやすいリズムを、声や歌にして出しながらかなわとびを練習するならば、リズムの感じを実感として感じとり、リズムよく続けて跳ぶことができるであろう。

リズムを感じさせるために声や歌を出すことを取り入れた理由は次の3点である。

- ① 2年生の子どもは、体の一部分（例えば手首や膝など）を、運動のこつとして意識しながら同時に全体の運動をコントロールすることが困難である。
- ② なわとび運動は、動きの質をとらえてそれを具体的な言葉で表現しにくい（言語化しにくい）。  
こつを言葉で言い表しにくい。
- ③ 例えば、早口で話すついで体も速く動いてしまうなど、声と体は相互に関連して働きやすい。

これは、BGMなどの外部のリズムに合わせて跳ぶのではなく、自分の内から発した声や歌のリズムに自分の跳躍を合わせようとするものである。

(5) 学習の実際

- ① 単元にはいる前の支援

A なわとびの世界に没頭し、没頭するための演出

2年生の子どもにとって、なわとびはすでに経験している運動である。なわとびに対する思いがどうであれ、どんな思いを持った子どもにとっても興味をそそり、没頭できるような演出をしようと考えた。そこで、本単元では、なわとび王国から手紙が届いていると子どもに話し、不思議ななわとび王国へ冒険をしに行こうと投げかけた。

- ◎ なわとび王国へ修行に出かけ、うまくなって帰ろう！

設定 なわとび王国には達人が住んでいる。

達人の教え その1 「なわとびには何百種類ものとび方があるが、その基本は1回旋1跳躍じゃ。」「1回旋1跳躍でも数え切れないほどの種類があるぞ。」「みんなも探してみたらどうじゃ？」

達人の教え その2 「なわとび王国の練習のしかたの秘密を教えよう。この方法でこの国の人たちはみんな楽しくなわとびをしてうまくなっている。」

＜練習の順序＞

まず → なわをとばずにとび方をおぼえたら、  
次に → 声を出しながらリズムをとって、  
さらに → 歌を歌いながらとんでみよう！

B 教え合い、助け合い、見せ合うためのグループの設定

短なわとびは主として個人で取り組む運動であるが、次のような意図からグループを設定した。

- ・ 練習のしかたの適切さを見合い、教え合って、修正しながら学習することが期待できる。
- ・ 技のできばえを見合うことによって、そのよさに気づかせることができるとともに、自己のイメージと比較することができる。
- ・ 工夫しているところを見せ合うことによって、そのよさに気づかせることができるとともに、それを取り入れることができる。

② 学習過程におけるA児の主な反応（本時 第二次 第4時）

本時の目標 両足・片足を組み合わせた跳び方を工夫し、リズムよく続けて跳ぶことができる。

学習過程	指導・支援活動
1 準備運動をする。 跳びながらの足踏み 縄跳び	1 なわとび王国へ冒険をしに行こうと誘いかけることにより、本時の学習に対する意欲を高める。
2 本時の共通のめあてを認識する	2 両足と片足を組み合わせた跳び方を具体的に理解させるために、教師が示範をし、足のステップの仕方に着目させる。
3 自己のめあてを決め、練習する 足のステップ 声 歌 3拍子 4拍子	3 各自で工夫した跳び方をみんなに紹介させ自己のめあてを決定する際の参考にさせる。 ① 自己のめあてとする技でリズムよく続けて跳べるようにするために、「けこわ／＼」などの声を口ずさみながら行わせる。 ② 8拍間（8拍間）できるようにしたら、リズムに合う歌を口ずさみながら練習するように伝える。
4 技のできばえを確かめる。	③ グループ発表会を行わせ、友達の跳び方の工夫と楽しさに気付かせる。 4 発表タイムを設け、自己の技で声または歌に合わせて跳ばせることにより、リズムを体験させる。
5 学習のまとめをする。	5 次の点を発表させ、次時のめあてを決定する際の参考にさせる。 ・ 自分が跳びながら思ったこと ・ 友達の跳び方で「おもしろいな」と思ったこと

表1 A児の実態（事前のアンケート調査より）

質問項目	答え
なわとびは好きですか	好きでも嫌いでもない
そのわけは何ですか	なんとなく
なわとびで、どんな勉強がしたいですか	1回旋1跳躍がうまくなれるような勉強
10回以上つづけて跳べる跳び方はなんですか	1回旋1跳躍の前とびだけ

学習過程2 共通のめあてをつかむ場

T「なわとび王国へようこそいらっしゃいました。」

T「今日から3時間かけて、片足と両足を混ぜ合わせた跳び方をつくります。」

→ 両足の組み合わせによる跳び方との違いを示範

学習過程3 自己のめあてを決める場（確認する場）

T「自分に合うやり方でやりましょう。」「こんなやり方でやるぞというのが決まった人から帽子を赤に変えましょう。」

- 試しにやってみさせ、修正が必要な子どもはここで修正させる。
- 3人の子どもにやってみさせ、みんなに例として紹介する。

T「うまくいかなかったら、なわとびなしで声に合わせてステップを踏む練習をしてみようね。」

- 練習の順序を確認させる。

Aのめあての跳び方→学習カードを参照

学習過程3 自己のめあてを追求する場

- A→ なわをおいて、ステップだけの練習を行い、リズムをつかもうとする。
- ケン・ケン～ゲー・ゲーのステップができ、「できた!」と大きな声を出す。
  - なわを使っでの練習と、使わないでの練習を交互に繰り返し行い、11回やったうち、7～8回あたりからリズムよく跳べるようになってきた。



< A児の学習カード >

11月15日 なわとび日記

このよび方でとんだよ!

	1	2	3	4	5	6	7	8	
右	○	○	○	○	○	○	○	○	○
左	○	○	○	○	○	○	○	○	○

を 3 セット!

★リズムは、1 2 3 4 5 6 7 8. 1 2 3 4 5 6 7 8.

うたわなかったよ。

リズムよくつづけてとんだよ!

100 てん!

30分以内の練習時間

100 てん!

心に残ったこと

はじめて、リズムよくた  
足もまげてうまくなった  
ことです。

③ 単元終了後の子ども達の意識（アンケート調査より男子18名，女子19名，全37名）

表2 授業全体に対する評価

1 「なわとび王国へ行こう」の授業は楽しかったですか。	
・とても楽しかった	29
・楽しかった	8
・あまり楽しくなかった	0
・全然楽しくなかった	0

表3 声を出したり，歌を歌ったりしたことに対して

1 声でリズムを言ったり歌を歌いながら跳ぶのはうまくなるためによいことだと思いましたが	
・すごくよいと思った	29
・まあまあよいと思った	6
・あまりよいとは思わなかった	2
・全然よいとは思わなかった	0

2 今の自分になわとびが好きですか。		
単元以前		単元終了後
19	・大好き	26
12	・好き	11
6	・どちらでもない	0
0	・嫌い	0

2 次の時，あなたはリズムをどこに感じますか。 (項目を選択)		
なわとびを「ただ跳んでいる時・・・」		声を出してリズムを言ったり，歌を歌って跳んでいる時・・・ 
0	・声や歌	32
11	・膝	0
	・ジャンプする	
7	足音	0
6	・なわの音	1
2	・回っている縄	0
2	・手首	0
1	・足首	0
1	・その他	心，体 各1
	・感じるけど	
3	よくわからない	2
4	※感じない	1

3 跳び方をいろいろと工夫することはおもしろかったですか。	
・とてもおもしろかった	29
・おもしろかった	7
・あまりおもしろくなかった	1
・全然おもしろくなかった	0

表4 自己評価カードから（第二次の1回目と6回目の比較）

	項 目	1回目 (33名)	6回目 (36名)
リズムを跳ぶとき	とてもよく跳べた	17	32
	まあまあよく跳べた	8	1
	あまり跳べなかった	4	2
	全然跳べなかった	4	1
挑戦タイムの気持ちは？	とても気持ちよかった	28	34
	まあまあ気持ちよかった	0	0
	あまり気持ちよくなかった	1	1
	全然気持ちよくなかった	4	1

### 3 考察

子どもの豊かな感性を育む支援であったかどうか、授業仮説の視点を考察する。

＜仮説＞  
 自分がやりやすいリズムを、声や歌にして出しながらかなわとびを練習するならば、リズムの感じを実感として感じとり、リズムよく続けて跳ぶことができるであろう。

表5 子どもが決めた声のリズム・選んだ歌

声のリズム	選んだ歌
タン, タン, タン, タン・・・ トン, トン, トン, トン・・・ いち, に, さん, し・・・ など	◎ (4拍子) → 森のくまさん たきび ジャンボリー どんぐりころころ 線路はつづくよ 手のひらを太陽に かえるのうた など ◎ (3拍子) → 思い出のアルバム みかんの花 など

(1) リズムを声や歌に出しながら跳ぶことがリズムよく続けて跳ぶことに効果があったか。

単元終了後の子ども達の意識を見てみると、多くの子どもが声でリズムを言ったり歌を歌いながら跳ぶのはうまくなるためによいことだと答えている (表3-1)。また、「リズムをどこに感じますか」という問いに対して、「なわとびをただ跳んでいる時」には、膝や手首などの体の部位や、なわ、足音など、さまざまであるが、「声を出してリズムを言ったり、歌を歌って跳んでいる時」には、32名の子どもが声や歌にリズムを感じている (表3-2)。これらのことから、リズムをもつ声や歌を口ずさみながらかなわを跳ぶことは、リズムを声や歌に焦点化させ、それがなわとび運動の体の動きのリズムを創り出すことに有効に作用したのではないかと考えられる。

一方、声でリズムを言ったり歌を歌いながら跳ぶのはうまくなるためにあまりよいことだとは思わないと答えた子どもが2名いた (表3-1)。この2名の子どもの跳び方を観察してみると、ジャンプした後に膝から下の部位が後方に流れており、上下に跳躍すると言うよりも後方に地面を蹴りながら跳躍しているように見受けられた。また、なわとびをしながら歌を歌うのは、「ハアハア」と息苦しいとも答えたことから、リズムの焦点を声や歌に感じることができるようには、余計な力を抜いて意識が跳躍以外の部分に向くように、ある程度、技能に習熟してなければ難しいと思われた。

(2) リズムを声や歌に出しながら跳ぶことが気持ちよさを感じさせることに効果があったか。

自己評価カードの回答 (表4-1回目) の中で、「全然リズムよく続けて跳べなかった」4名の子どもが、挑戦タイムでの気持ちよさをどう感じていたのだろうか。4名の子どものうち、「挑戦タイムで全然気持ちよくなかった」と答えたのは2名で、他の2名は「とても気持ちよかった」と答えている。このことから、リズムよく跳べなくても声や歌が何らかの心理的な心地よさをもたらしたのではないかとと思われる。「歌を歌いながら跳ぶのと、何も歌わずに跳ぶのとでは、どんなことが違うと思いますか」との問いに対して、15名が「心の中に浮かんでくることが違う」と答えた。その違いをまとめたのが表6である。

反対に、挑戦タイムで「全然気持ちよくなかった」と答えた4名の子どもは、全員「あまり、または全然リズムよく跳べなかった」と答えている (表4-1回目)。これらのことから、子どもが感じた気持ちよさの中身は、必ずしもリズムよく跳べることだけに限らなかったが、やはりリズムよく跳べることが気持ちよさを感じさせる大切な要素となっていたように思われた。

表6 心の中に浮かんでくることの違い

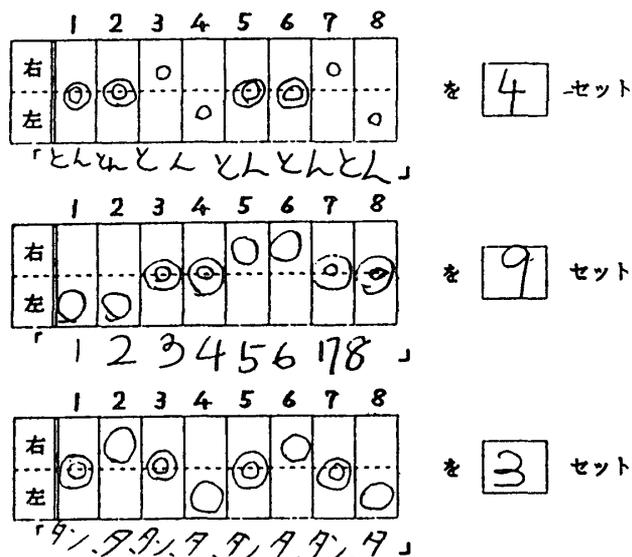
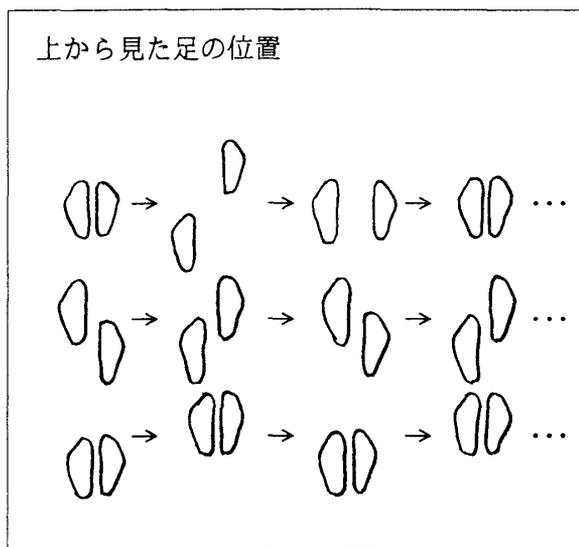
歌いながら跳ぶ時・・・♪	何も歌わないで跳ぶ時・・・
気持ちいい	気持ちよくない
気持ちいい	何とも思わない
楽で気分がいい	リズムと雰囲気が全然違う
気持ちよくてよく跳べる	つまらない
楽しい気分になってくる	心の中がまっくら
楽しい	ただのなわとび
心の中が楽しくなってくる	一応楽しい
心の中がすっきりしてくる	あんまりうまく跳べない
気持ちよさが空をとんでいる様子	暗い様子
リズムに合ってくる	リズムが合わない
その歌の景色	ただのなわとび
歌に関係ある絵	うさぎが跳ぶような・・・
	なんとなく違う・・・

(3) 技術構造への着目のさせ方はどうであったか。

本単元では、跳び方を1回旋1跳躍に絞り、足のステップを工夫することに着目させようとした。子ども達の足のステップの工夫には、次のようなものが見られた（自己評価カードから）。

<両足の踏みかえによる工夫>

<両足・片足の組み合わせによる工夫>



掲載しているものはほんの一例であるが、子ども達はさまざまな足のステップを工夫していた。着目させようとした足のステップは、2年生の子どもにとって工夫が簡単で、しかも自分の力に応じた工夫が可能であったようである。これは、「跳び方をいろいろと工夫することはおもしろかったですか」の問いに、ほとんどの子どもが「おもしろかった」と答えた理由ではないかと考えられる（表3-3）。